

スクールカウンセリング業務におけるカウンセリング研修の考察
—10年の経過における考察とコラージュを用いた「癒し系研修」の提案—

和田 百合子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第53号抜刷）

報告・資料

スクールカウンセリング業務におけるカウンセリング研修の考察 — 10年の経過における考察とコラージュを用いた「癒し系研修」の提案 —

The Consideration of Counseling Training in School Counseling

— This is examined through the passage of ten years and “Healing Training” by using collage technique is proposed. —

和田 百合子

キーワード：カウンセリング研修、スクールカウンセリング、10年の経過、コラージュ、癒し系研修

目 的

筆者は、大学という教育現場で学生相談とカウンセリングの授業を行うことを中心に業務を行わせてもらっているが、1週に4時間弱のみ中学校でスクールカウンセラー（以下SCと略する）をしてきた。地域における教育相談の活動を通じて、小中高の教育現場からカウンセリング研修の依頼を受ける機会が多くなった。これらのカウンセリング研修、カウンセリングの授業での実践とSC業務中の「研修会」の実践について、筆者は1999年に中間報告として纏めた（美作大学紀要通巻第44号）。この中では、カウンセラーが研修を通じて、教師のかたがたに、臨床心理学的な見方を伝え、血肉にさせていただくことは可能なのか、また、それはどのような形で行われると効果的なのかを、授業や研修の実際を記述して検討した。

本論の目的は、上記の中間報告と併せて、以下の2点を中心に、自身の事例を通して、SC業務におけるカウンセリング研修のあり方を検討することである。

①10年間のSC業務中の研修活動を一人のスクールカウンセラーの事例として記述し、検討を加える。

②研修は、それを通じて教職員と共に適切な子育ての提案を行う場でもある。2005、2006年度のコラージュを利用した保護者向けの研修の試みを「癒し系研修」

と名づけて提案したい。

本論でいうSC業務とは、長く学校現場で行われてきた教育相談活動一般ではなく、1995年度から試行された現、文部科学省の「スクールカウンセラー調査研究委託事業」、現在は、「スクールカウンセラー活用事業補助」の下での業務を念頭においている。また、本論で言う「研修」は、教職員対象、保護者対象の双方を含んでいる。

方 法

- ① 1996年度から2006年度まで筆者が実践した主にSC業務でのカウンセリング研修を整理し検討する。
- ② 派遣学校における教師、保護者の研修に関するニーズと実際に実施した研修との対照を行う。
- ③ 研修に参加した人の感想、その後のSC業務での展開から考察する。
- ④ 主にSC業務でのカウンセリング研修に関する文献から自身の事例に検討を加える。

SC業務におけるカウンセリング研修に関する 目的・意義に関する論述について

「スクールカウンセラー等活用調査研究委託事業要

項（1997）では、校長の指揮監督の下でSCは次の職務につくことになっている。

- (1) 児童生徒に対するカウンセリング
- (2) カウンセリング等に関する教職員並びに保護者に対する助言・援助
- (3) 児童生徒のカウンセリング等に関する情報の収集・提供
- (4) その他児童生徒のカウンセリング等に関し、関係の学校において適当と認められること

当初、スクールカウンセラーの職務として「研修、保護者向けの講演」は、①児童生徒へのカウンセリング②カウンセリング等に関する教職員並びに保護者に対する助言及び援助ほどには、明確な位置を確定していないと言えよう。

財団法人日本臨床心理士資格認定協会・学校臨床心理士ワーキンググループ(編)『学校臨床心理士(スクールカウンセラー)の活動と専門性』(2002)のSC業務の中でも研修はカウンセリング、コンサルテーションと同等には位置づけられていない。

一方、実際のSC業務の遂行においては、『(岡山県版)学校臨床心理士の手引き 一どのようにスクールカウンセラーは活動するのか』(2005)の中に「カウンセラーによる児童生徒・保護者への直接的な支援を大切にしながら、教育相談の手法などについて、研修会などを通して、教員の力量の向上に資することも重要な職務である」(p.2)という記述がある。

公的な職務内容では、「研修」という名称は前面にでないが、実際の業務では、重要性は認識されていると筆者は考えている。SC業務におけるカウンセリング研修の目的や意義を論じた文献のレビューは困難であったが、背景には、

- ① 本論で議論する対象のSC業務の歴史が短いこと。
- ② 児童生徒へのカウンセリング、教職員へのコンサルテーション、学校内外の諸機関とのコーディネーションほどには、「教員向け研修、保護者向けの研修・講演」は、重要な位置を確定していないこと。

③ SC業務に関して、「研修」という実施内容ではなく、機能として論じているために、文献が統合できないこと。たとえば日本学校相談学会認定学校カウンセラーの内容は、カウンセリング機能、予防開発的機能、コーディネーション機能などという名称が使用されている。

④ また、文部科学省のスクールカウンセラー任用資格をめぐる、さまざまな専門学会から疑義があり、各々の学会の専門的な背景の相違から業務内容の力点が異なり、用語が共通でないこと、活動の領域が流動的で開発途上であること。

⑤ 「カウンセリング研修」の中には、教員研修、教員との事例検討会、ビデオ研修、保護者講演会、保護者向け研修などさまざまな「研修」が含まれていること。

等が言えよう。

このような事情が前提であるが、カウンセリング研修に関して、方法や目的を論じた論述を見てみる。

伊藤(2002)はスクールカウンセラーの仕事を5本の柱にたとえ、①子どもの面接、②保護者の面接、③教師のコンサルテーション、④外部との連携、⑤研修、講演の実施、その他に広報活動や行事への参加をあげている。その中で研修に関して教師対象としては、スクールカウンセラーの勤務時間が短いのであるから、自分が全部抱え込まないで子どもや保護者に直接対応することが多い教師に、カウンセリングの基礎を学び、そういう技術を身につけてもらうほうが、貢献度ははるかに大きいと述べている。

2006年度、岡山県におけるSC一人分の勤務時間は、一学校につき週4時間35週であるので、時間の制約を活かした活動として、伊藤の指摘は、素朴に納得できることである。

また、常勤の学校カウンセラー・教師カウンセラー(主に「日本教育相談学会認定学校カウンセラー」の資格を参考)と非常勤の学校臨床心理士を比較し考察した論文の中で、西山(2004)は自身の実践を基盤に、前者を「日常性」を特徴とし、教育相談活動全体を網羅する傾向があるし、後者は、「外部性」を生かした

立場で活動する、業務の内容は自分の支援できる分野を把握した上で、勤務学校と交渉し、決めていく傾向があると論じている。

「研修」は、文部科学省のSC業務では、この外部性を生かしたものとして単発でフレキシブルな時間設定ができる、短時間で効果が期待できるなどからその業務に適合していると思われる。

國分（1997）は、「スクールカウンセリングを学校現場に普及定着させるために研修を実施する場合、（中略）『カウンセラー養成の研修』なのか『教師のためのカウンセリング研修』かを識別する必要がある」と指摘している。（p. 27）

研修の目的は、指摘のほかに、「生徒指導に臨床心理学的な見方を取り入れていただく」「保護者に思春期の子どもとのかかわりの工夫の一助にいただく」など様々あるが、この識別は、基本的なことであろう。

安田（2004）は、対人援助職にとってのカウンセリング研修を論じた論文で、ロールプレイと記述式の配布物を使用する効果を参加者のアンケートから裏付けた。結果には、やはり授業を含めたカウンセリング研修にロールプレイや記述用紙の作成を重視する筆者も賛成するものがあつた。

また、保田の主張で新鮮だったのは、「カウンセリング研修に対して関わりやコミュニケーションの実践力向上を目指し、その技術的側面に期待しているが、（中略）専門職の特徴である目的性や利他主義、倫理と一体となった研修であることが求められる。そうしないと、現代の利己主義、営利主義、商業主義に侵害を受け、専門技術、技能が一人歩きしてしまい、入所者や患者などへの人権侵害の道具になりかねないからである」（p. 67）との指摘である。

カウンセリング研修は、使用によっては、他人の内面に容易に進入的である側面をもっているため、その技術の伝え方の倫理には、注意が必要である。また、研修対象者がクライアントになりうる可能性もある。その時に、カウンセリングや心理検査の効用を偏見なく享受できるような配慮もこの倫理性に含まれるであ

ろう。研修の倫理性は、カウンセラー側の「良いことをしているに違いない」という思い込みの元に見えにくくなるので、見落とさないように一層の注意が必要である。倫理性は目的性と併せて押えておく必要がある点である。

橋本・夏野（1997）は、教師のカウンセリング研修の意義を教師の自尊感情と対人スキルの獲得をキーワードに調査し、「カウンセリング研修において心理社会的なスキルの高揚が図られるならば、教師の自尊感情は高まり同時に対生徒関係をポジティブなものとする」（p. 37）と述べ、このときの内容を「対人関係に必要な心理的スキル（関わりスキル、傾聴スキル、自己主張スキル、攻撃性対処スキル等の獲得を意図したワークを行う）」としている。

カウンセリング研修の意義に関して、対象者や内容手法、効果の測定、倫理性等切り口はさまざまであるが、カウンセリング研修の目的性の検討は、意図するにせよ自明のこととして意識しないにせよ、重要であると認識できた。研修の実施にあたっては、むしろ、教員や保護者のニーズに応じることや研修を退屈なものにしないためにロールプレイや技法の導入を工夫することに注意がむきがちになるので、研修の具体的な目的の検討が落ち易いとの認識が必要ではないだろうか。

10年間のSC業務の中の研修活動

— 一人のスクールカウンセラーの事例 —

筆者の10年間のSC業務の中の研修活動の体験を記述して、カウンセリング研修に必要と思われた点について考察する。

1、1996年～1998年の研修の特徴

経過を検討するには①SC事業実施より何年経過しているかというSC事業経過軸と②当該校に派遣されて何年経過したかというSC校赴任軸の双方の時間軸が必要である。2年間を便宜的に導入期、展開期、充実期に分ける。導入期の研修は、SC業務内容、特にコンサルテーションと集団守秘義務の説明を実施し

資料1 A 中学校教育相談研修 2003 年度研修レジメ要旨

1、教師がする教育相談とスクールカウンセラーが行うカウンセリングの在り方と相違点：誤解されやすい点

1) 治療優先ではない、ミニクリニックではない。

共通の目的：子供の発達を援助するもの
課題達成的かどうかの違い、アプローチの違い、視点の違い、特質、学校組織の中での位置づけ、分掌、技法

2) 一部の子供だけを対象にするのではない。
しかし、特質と役割の違いは大切にす。

3) 子供の中の不適応部分のみをみているのではない。スクールカウンセラーも学校側からの視点を学ばなければならない。

4) 「聴く」、「待つ」、「受容」に注意
現実性 具体性をもったものにする。

2、守秘義務についての説明

た。ただし、SC事業経過軸では、1999年以降でも、SC校赴任軸で初年度であり、SC業務に関して教職員の方に説明が必要であれば、資料1のような内容で導入期の研修を実施した。展開期は、事例研究を勧めた。終結期は、「SC業務の引継ぎに関すること」を行った。

2、1999年～2004年の研修の特徴

校内での教育相談部会SC研修会が年2回等定例化、PTA主催講演会が学年別で実施等組織化された。保護者のニーズを重視し、教育相談部と共に事前事後アンケートを実施した。2002年事前アンケートでは、「自立に向けての親の支援とはなにか」等一般的なものの以外に、「『一般的によい子』と称される子どもたちの本音をどこで聞きとれるか」「子どもが切れたとき、暴れたときどのように接すればよいのか」等具体的な方法を問うものが出現した。2002年の事後アンケートでは「親ががまんできる方法を教えて」「親

のストレス」等、親側のケアを求める記載が出現した。事例検討会では筆者が言う「3分割方式レジメ法」(和田 1999)を提唱した。担任が自分の対応を内省し他の教職員と共に課題を見つけ、適切な対応を模索する。2002年は、非行傾向がある「学校内不登校生徒」への対応をめぐり、教師間で認識の違いが見受けられたことに関して、教育相談部と協議し、対象の生徒を事例研修の対象として教師集団の中で共通理解ができるよう試みた。研修を活用したコーディネーションである。しかし教師集団内の認識の違いは大きく、全体で担任を支える流れにならなかった。2004年事例検討会では、前回の反省を活かし、石隅・田村式「援助チームシート」を当該の学校の状況に合わせて使用した。この頃から、事例検討会は、行動指針をだす実践的なもの、短時間でできるものを意識して実践した。2003年虐待の事例があり、危機介入が行われた。この際の研修は、緊急、必要時に実施、短時間、限定のメンバーで行われ、後日担任などから評価を得た。SC主導だけではなく教育相談に詳しい教師、養護教諭もリーダーシップを取り、介入、提案をする研修も活用した。

3、2005年～2006年の研修の特徴

校内のリソース(人材、予算)を活用した。教育相談に詳しい教師が講師にたち、SCはフォローに回る方法を多く実施した。教師が校外で教育相談の研修を受講し、自分が納得し消化した内容だけを同じ教師集団に伝える手法は教員に受け入れられやすかった。2006年、筆者が言う「癒し系研修」を提案し、実施した。5～6名の保護者と教師のグループでコラージュを作成し、ファシリテーターに守られて発表し感想を共有する。コラージュ作成のテーマは「子育ての楽しさしんどさ」(中学2年生保護者対象)を設定した。この詳細については、次の項の「癒し系研修」の提案に記載する。

4、研修に対するニーズへの応じ方の事例

「研修」は、SCが提案することも大切であるし、派遣学校の教員や保護者のニーズに応じることも大切

資料2 「研修」をキーワードにした、一スクールカウンセラーの10年間のSC活動の概観：ニーズと対応
派遣学校における研修に対するニーズとそれへの対応を同じマーク(例：★)で結んでいる。

1. 1996年-1998年(1995年文部省「スクールカウンセラー活用調査研究委託」事業開始)	
派遣学校における意見	研修内容
SCが赴任地域で初めて導入された時期 ○SCが何をするのかわからない。 SCは、生徒のカウンセリングの内容を秘密にするのではないか	○SC業務内容の紹介、コンサルテーションや情報連携、集団守秘義務の説明
展開期 ☆心理面で個別配慮が必要な生徒の存在は理解できるが、担任制や繁忙のため、学年団で生徒の状態を共有できない。 ☆暴力行為、授業放棄、ネグレクトをめぐる親子関係の問題などの生徒の背景を理解したい。 終結期 ●SC派遣終了後の教育相談をどう充実させるか	☆事例検討会 ●研修の形でなく「教育相談推進委員会」で協議の形。SC業務の引継ぎに関する事、別室登校の教室を設置するときの注意点、不登校生徒の個人記録表の改良と学年団での共有についてなどを議題にする。
2. 1999年-2004年	
派遣学校における意見	研修内容
◎保護者にも中学生の子どもの適切な付き合い方を学んでほしい。 ◎SCの活用に関して、保護者にPRが不足している ◎教員、保護者ともに話を一方的されるのでは、聞きにくい ◎また、学校が保有する価値観と保護者の価値観が共有できない ★学校内不登校生徒の対応に関して教師間で認識の違いが大きい △危機介入の必要な虐待の生徒	◎PTAの役員に研修に関して研修事前・事後アンケート調査 ◎学年別保護者研修会、親子の会話のロールプレイ。会話例の作成を保護者の役員に依頼し、アイデアをだしてもらう ◎教育相談に詳しい教師、養護教諭にリーダーシップをとってもらおう ★認識を共有できるように事例検討会、「3分割方式レジメ法」→十分な結果が出ない→行動指針をだす実践的なもの、短時間でできる事例検討会に変更。石隅・田村式「援助チームシート」の応用 △限定メンバーの事例検討会を必要時に短時間で実施する
3. 2005年-2006年	
派遣学校における意見	研修内容
●教師は、広範囲の分野で研修が課せられていて、多すぎる。主体的に、積極的に取り組める研修がよい ◇保護者自身がイライラしている、余裕がないと思う ◇保護者間で子育てに関して共有する価値観がなくなってきた。	●校内のリソース(人材、予算)の活用、講師はできるだけ教育相談に詳しい教師が行い、SCはできるだけ、フォローに回る方法 ◇「癒し系研修」の提案。保護者と教師のグループでコラージュを作成し、ファシリテーターに守られて発表した後、感想を共有する。その後、カウンセラーから、子どもの訴えに対して、受容と共感をすることの意味について短いお話を。テーマ例：「子育ての楽しさとしんどさ」

である。ニーズとそれへの対応を資料2で対照した。対応の実際を見てほしい。

「癒し系研修」の提案

経緯：教員、保護者ともに話を一方的されるのでは聞きにくいという意見、保護者はイライラし、疲れているので、保護者も元気になる研修をとということで、考えて提案したのが、コラージュを使った保護者のグループワークである。コラージュという名称が馴染み難いので「癒し系研修」と名づけた。

目標：保護者と教員にゆったりした時間をすごしてもらう。思春期の難しい子どもとのかかわりの中で少し子どもと距離をおいて自分の子育てをふりかえってもらう。他者の作品から子育ての新たな気づきを得ていただく。テーマを「子育ての楽しさとしんどさ」とした。テーマは研修内容に応じて、考案するのがよいと思う。B町の研修の場合、対象は、幼児から中学生までの保護者と幅が広がった。従って目標を、育児不安や虐待の危険を感じている方に少しでも相談して戴くきっかけ作りをすることと、日頃の育児の大変さからちょっとでも離れて、リラックスして戴くことに設定した。そのため、子育てに向き合うテーマよりも、この場を利用して、気持ちを整理していただく内容のテーマ「心を整理する」とした。

準備：保護者への案内：参加するまでに、自分で使用したい雑誌や広告を用意してもらう。配布物の準備。

保護者、教師を含めたグループを6名前後とする。カウンセラーは、導入と最後にまとめの話をする。ファシリテーターを置く。教師の中からカウンセリングに関して、基礎的な研修を受けていて、メンバーの意見を共感的に聞き、また、グループの心理的な安全を守る基本ができる人になっていただく。

実施：2005年T市内のC中学校で初めて実施した。教育相談推進委員会で協議し、保護者が参加しやすい夕食の片付け後の時間に設定し、対象は、全学年の保護者の自由参加として、呼びかけることに決まった。教師を含め、20名ほどの参加であった。主催者の挨拶

資料3 コラージュを用いた「癒し系研修」の手順2-1

美咲町元気の出る子育て支援講座 簡単な作業を通じて気持ちをすっきりさせましょう

美作大学 和田 百合子

今回は、コラージュを用いて、気持ちをすっきりさせましょう。コラージュとは、簡単に言えば切り張りすることです。今日は、雑誌や新聞その他、紙面を自由に切ったり、ちぎったりしてそれを画用紙に心の向くままにはってゆきましょう。

今日は、コラージュを気持ちを自由に表現するために用います。上手、下手や芸術的かどうかなどは、まったく気にしないで行ってください。また、グループでそれらのことばを言い合うのも適切ではありません。

自分の思うままに作業できるのが一番大切です。

テーマは「心を整理する」です。

◎ できるだけ、時間内は、自分の世界に入ってください。静かになることが多いようです。そのときは、お隣の人が自分の世界にどっぷりひたれるように、そっとしておいてあげましょう。次のようなことをヒントにしてみてください。

☆最近、子どもを育てていて、

うれしかったなあと思ったこと

こまったなあ、大変だなあ、少し不安だなあと思ったこと

子育ての夢、どういう大人になってほしいかの夢

などのサブテーマから一つ選んでコラージュを製作します。

☆サブテーマを絞り込めない場合は、画用紙の紙面をサインペンなどで区切って複数の小さなテーマを選んでよいと思います

☆最近、人生は、捨てたもんじゃいなあ、ええこともあるなあと思ったことを小さなテーマにしてもよいと思います。☆今は、大変だけれどこうなれたらいいなあと思うことをサブテーマにしてもよいと思います。

やメンバー紹介の後、導入を資料3の要領で行う。全体の時間が90分の場合、導入に10分、制作に50分、小グループの発表に15分、まとめは15分ぐらいが目安であるが、うまく自分の世界に入り制作に熱中できるよう、もう少し時間にゆとりのあるほうが良い。制作の終わりに、資料4の要領で心の作業を終了することを促す。小グループで、順番に各人が作品の紹介をし、その作品についてメンバーがプラスの感想や質問を行う。タイムキーパーをおき、質問を含め、一人2分30秒とする。とても生き活きと共感し合えたのが確認できた。この方法は、杉浦（2002）のコラージュ療法の研修で習得した方法を参考とした。心の世界を披露で

資料4 コラージュを用いた「癒し系研修」の手順2-2

第3回 元気の出る子育て支援講座 和田 百合子

お母さんのための癒しのワークコラージュ作りを通じて

★作品に題名をつけてあげましょう

★作品の裏にあなたの名前と今日の日付や時間、題名を書いて
みましょう

★どんなことを考えて作りましたか？

どんなことを表現しようとしたのですか？

どんな所がお気に入りですか？どんな所が難しかったですか？ 等

お疲れ様でした。メンバーで作品にこめられた
思いを共有しましょう。共感されると嬉しいも
のです。メンバーの感想を心を傾けて聴けると
よいですね(傾聴)。否定しないで、プラスのメッ
セージをさしあげましょう



写真1 参加者(50代後半男性)の作品：3人娘とそれぞれの好物。子育ての華やかな思い出と孫との生活を想う時間であったとのこと

きるが、他のメンバーから侵入されすぎない絶妙な時間と思われる。

『癒し系研修』の考察：このときの保護者の感想は、資料6である。保護者、教師ともに子育てについて新たな気づきと深い感動を得ている。残念ながらそれらの作品のいくつかを許可を得て記録したが、上手く記録できなかった。ここで紹介できないのが残念である。その後、B町の子育て支援研修講座で実施できた。このときの作品例が写真1である。

コラージュ療法を応用できると保護者や教員は子育ての喜びや迷いや未整理のもの等を表現し、紙面に表出することができた。作品が完成し、心に余裕ができたところで、他の参加者の作品や語りから子育てに関する学びが合いがあった。

この研修の目的は、コラージュ療法の体験ではなく、参加者の体験と筆者のカウンセリングの実践を結んで、子どもの心の健康や成長に必要な大人の行動や態度を伝えることである。このため、体験終了後、必ず短い講話をする。伝えたい内容は、折々に用意する。

資料5 コラージュを用いた 研修の終わりに使うメッセージ

- 子どもにとって、愛情は送られることよりも、愛情という贈り物として、受け取ることのほうが大切。プラスの情緒(うれしいよ、有難う、大好きだよ、大切なんだ)(よくできたね、すごいねでは不十分)を表現して伝える。子どもの情緒をよく聴く、あるいは言葉にできるようにしてあげる。
- 心を整理する：心の引き出しにうまく入れられることも大切。親の心の安定。気軽に先生にご相談する。教育相談の利用
- 孤立しないこと。子育ての価値観が私事化。だからこそ、孤立しないこと。PTA活動への参加しやすい環境作りと積極的な参加
- 自分の子ども時代をもう一度生きる。新しく生きる
- 子どもも自分も生き物であることを忘れない。
- 生き方の自由と生きることの責任

子どもの主観的な心の世界を大切にしてほしいと伝える場合もある。資料5は、B町の同じタイプの研修後の講話に使った資料である。自分固有の気持ちを受け入れられることと受けとめたことを伝える大切さは、一方的な講話より体験学習を通すと、理解を戴きやすい。伊藤(2002)は価値観の多様化の中で「選ぶ自由」と同時に「選び取る迷い」が生じると述べている。子育ての当事者は、正解のない子育ての道を歩かなくてはならない。芸術が持つ多様性、表現性とグループワークの中の受容がこのような不安の表出と癒しに適合したと思われる。一方、準備の大変さやファシリテーターの手配など困難も抱えている。講師以外に別の予算が必要な場合もある。担当者の疲労も実は大きい。昨年より半減した(岡山県)SC業務での、実施は困難にもなった。SC業務以外の別の機会を得て実施の検討をする場合もあると思う。

結 論

1. SC業務における筆者の10年間のカウンセリング研修を概観した。形態では「形式的」→「定例化・組織化」→「介入・提案」→「短縮・雛型」「校内のリソース利用」、内容的には、「SC活動のガイドンス」→「より具体的な子育て法」「危機介入・行動指針」→「癒し系研修」「保護者や教師が主体」と選択肢が増した。これは、振り返ってみると「現場のニーズを『汲み取り、引き出し、応える』ため」(田畠 2007)の結果であったと考える。

2006年度の日本臨床心理士会主催「学校臨床心理士全国研修会」の研修の部会に出席したが、兵庫県のSCのパワーポイントを使用した心の健康に関する基礎的な研修の実践では、「介入・提案」→「短縮・雛型」の要素が感じられた。また、神奈川県SCのスーパーバイザーの研修では、欠席の生徒への対応に関して、日数や回数等が極めて具体的に指示されている。筆者が現場のニーズに応じてきた研修の形態の変化は、一スクールカウンセラーの体験だけではなく、時の教育現場の反映でもあるのであろう。

2. 研修を実施するときには、目的性や倫理性を明確に認識しないか、見落としやすいのでしっかりと見据える必要がある。筆者は、このあたりを文献でしっかり抑えていなかった。しかし、振り返ると、ほとんどすべての研修名は「子育てに生かすカウンセリング」「カウンセリングから学べること」というスタンスで行ってきた。筆者の場合、研修の目的は、子どもたちのカウンセリングの実践から学んだ、子ども心の健康や成長に必要な大人の行動や態度を伝えることである。SC業務の理解を得る場合もある。自身の業務を事例として振り返ることで、目的性と倫理性の重要さが認識できた。

3. 2005年から2006年に実施したコラーージュ療法を応用した保護者向けのカウンセリング研修を「癒し系研修」として紹介した。

引用文献

- 1) P. 1 和田百合子：カウンセラーが行う教師に対するカウンセリング研修の手法についての中間報告、美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要 通巻第44号、PP.102-109、1999
- 2) P. 1 文部省：スクールカウンセラー等活用調査研究委託事業要項、1997
- 3) P. 1 財団法人日本臨床心理士資格認定協会・学校臨床心理士ワーキンググループ(編)「学校臨床心理士(スクールカウンセラー)の活動と専門性」2002
- 4) P. 1 岡山県臨床心理士会(学校臨床心理士ワーキンググループ編)「(岡山県版)学校臨床心理士の手引き一どのようにスクールカウンセラーは活動するのか」P. 2、2005
- 5) P. 2 伊藤美奈子「スクールカウンセラーの仕事」岩波アクティブ新書、PP.11-32、2002
- 6) P. 2 西山久子「現場に生きるスクールカウンセリング」平松清志編著、金剛出版 PP.52-PP.53、2004、
- 7) P. 2 國分康孝 準備委員会企画公開講演「日本におけるスクールカウンセリングの課題」教育心理学年報 36、PP.26-29、1997
- 8) P. 2 安田勉：対人援助職にとってのカウンセリング研修の意義 青森保健大雑誌 6(1) PP.61-68、2004
- 9) P. 3 橋本宗和、夏野良司：教師のカウンセリング研修

における psychoeducation の導入と意義 教育心理学年報、36、P.37、1997

- 10) P. 3 和田百合子：A 中学校教育相談研修2003年度研修レジメ：S C の役割に関する質問にお答えして、2003
- 11) P. 7 田嶋誠一 第25回心理臨床学会大会 心理臨床ワークショップパンフレット P. 1、2007

参考文献

- 1) 杉浦京子「コラージュ療法 基礎的研究と実際」川島書店、1994
- 2) 森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕編「コラージュ療法入門」創元社、1993
- 3) 日本臨床心理士会主催「学校臨床心理士全国研修会」2006年度における報告 2006
- 資料6 (右) C 中学校2005年学年 P T A 学習会(コラージュ療法を応用した「癒し系研修」)の感想(教育相談担当者がまとめた感想から抜粋した)

- ① 突然目の前にあるものから連想することが、新鮮で楽しい。絵を書いている表現は、しにくいけれど、あるものを使うことで、表現がしやすくなる。他の人の話をその人の作品を見ながら聴けることに、意味があったと思う。子供とも是非やってみたい、
- ② 我が子をイメージして、コラージュするのは、意外な一面を表現したり、懐かしい面を思い出して、イメージしたり、いろいろ楽しくやらせてもらいました。また皆さんがコラージュ作品の説明をする時には、もっといろんな思いが、聞くことができ、楽しかったです。皆さん、お疲れ様でした。
- ③ 楽しい研修でした。作品の中に、気持ちや思い、考え方などが、ちらっと読みとれるのもよかった。硬い話や、難しい話や妙に現実的な話題より、より近づきやすく和やかに会話を進めることができた。クラスや学級Pで活用できると良いですね。
- ④ 短い時間だったけど、皆さんのそれぞれの思いっていうのが、少し伝わったので、自分自身のはげみにもなったかな！会に、出席したのは、初めてだったので、次回また機会があれば、もっと多くの参加を呼び掛けていきたいと思います。楽しい会になり、よかったです。
- ⑤ 楽しい時間が過ぎました。はじめは戸惑いましたが、なんとかやり終えて、自分も話をしたり、皆さんの話を聞いたりすると、すごく感動しました。家族とでも、してみたいと思いました。
- ⑥ テーマをもらっても、作業をしているうちに、時間がなく、とにかく作業進めるという感じで、形を整えただけだったけど、後で、つじつま合わせの説明をしながらだんだんと、いろんなことを思い出し、自分の子育てを振り返り、こんな感じで、これから子供に接したいなあなどと、いろんな思いが、湧き上がってきました。みんなが、自分の作品を見て思ってくれたことや、他の人の作品の説明を聞いて、家族のあり方など、いろいろ考えることができ、楽しく、有意義な時間を過ごせてよかったです。お世話してくださった皆様、ありがとうございました。
- ⑦ 研修というと、お話を聞くばかりのイメージでしたが、今回は、工作っぽくて、楽しい時間が過ぎました。子育ての楽しさしんどさが、テーマでしたが、自分の中の子育てのイメージが、作品となって、改めて、気づかされることもありました。とても楽しかったです。
- ⑧ 楽しい時間を過ごさせていただきました。どうなることかと思いましたが、みんないろいろなイメージや構想で、バラエティーに富んだ作品ができたと思います。作品を作っている間、子どものことを考えることができてよかったです。